

「何もできなくたって、励ますことはできる」

明星学園 宮下 智

昔々、そう、もう二十年以上も前の話なのですが、こんなことがありました。

その頃は、まだ年度初めに必ず開催する業務計画の冒頭に、それぞれのクラスで副主任と呼ばれる立場の人が、必ず一文を寄せることになっていました。

「今年度は、こんなつもりで私は働きますので、みんなで心を同じくして、この道を歩んで行きましょう！」と職員全員を鼓舞するための役割をこの文章が果たしていたのです。

ある年のこと、Iさんというまだ経験年数の少ないうら若き女性の職員が、その冒頭の文章の担当になりました。ページ数でいえば、2ページ、おそらく1600字程度が、与えられたノルマではなかったかと思います。支援能力も高く、文章力もある彼女の原稿の出来上がりにもみんなが多くの期待を寄せました。

ところが、仕上がってくる文章は、なかなか私が期待するようなものにならないのです。確かに、内容は理路整然としていて、間違ったことは何も書いてないのですが、何回読んでも、読む者の心を揺さぶるものがないのです。つまり頭の中だけで書かれている文章になってしまっていて、彼女の情緒が、気持ちが、言葉に乗っていないのです。

おそらく、「きちんとしたものを書かなくちゃ…」とか「立派な、恥ずかしくないものを書かなくちゃ…」、そんな気持ちが、彼女の心の中に先に湧いてきて、本当に思っている彼女の知的障害者の方々を支援するときの現場での熱い気持ちが、伝わらなくなっていたのでしょう。

原稿には、一回目の提出の時にも二回目の時にも、ダメ出しが出ます。

「あなたなら、絶対、皆の心を動かせる文章が書けるはずだ。もう一度書いてきてごらん。できるだけ自分の心に正直に書くことが大切だよ。現場であれだけ良い仕事をしているIさんなんだから、絶対書けるはずだよ」期待を込めて、彼女を職員室から送り出します。

三回目の原稿提出の日がやってきました。残念ながら、原稿の出来栄は良くありません。心を打つものがありません。また、ダメ出しです。すると、とうとう彼女は、私の前で、泣き始めました。「もう無理です。これ以上のものは書けません。もう私の精一杯です。どうやって書いたらいいか、全然わかりません」と。

それはそうですよね。「心を揺さぶるものがない」「心に正直に書いてこい」って言われたって、どうやって書いていいのかわからないに決まっています。

それでも、Iさんの高い能力に期待していた私は、もう一度書いてみてと、彼女を送り出しました。

そして、四回目の原稿提出…。

そこには、心揺さぶる素晴らしい文章があったのです。

「Iさん、すごいじゃない！書けたねえ。良かったよ。」原稿を読みながら、私の目は、涙でいっぱいです。原稿の内容の素晴らしさはともかく、無理して度々の原稿の再提出を命じて成功だったと、自分の部下指導の方法に満足している自分がそこに居ました。

しかし、「どうして書けたの？」と尋ねた私の質問に対する彼女の答えは、そんな私の自己満足を軽くぶっ飛ばすものだったのです。

「前に、泣いて職員室を出て行きましたよね。みんなに涙を見せるのは恥ずかしから、一生懸命涙を止めようとしてクラスに戻ったんですけど、どうしても涙が止まらなくて…。書けない自分に悔しかったんですけど…。でも、もう書けないと思って…。もう断っちゃえ！と思って…。だけど、クラスに戻ると、スッとSさんが私のそばに来たんです。そして、私の肩をぽんぽんって叩いてくれたんです。それが私には、『きっと書けるよ、Iさんなら。もう一度だけ書いてごらん』って、Sさんが私を励ましてくれているんだと感じたんです。それで、もう一回だけ書いてみようと思って書いたら、なんだかとても素直な気持ちになることができて、それで書いた文章が今日のものです。Sさん、目が見えないのに、私が挫けそうになって、涙を流していたのがわかったんですね…」

彼女が素晴らしい文章が書けたのは、私の度々のダメだしのせいではなかったのです。世間的には、最重度知的障害者と呼ばれていて、視覚障害までも持ち合わせ、食事にも排泄にも着脱にも、多くの支援の手が必要で、全く喋ることができないSさん、おそらく何もできないと思われ、何も役に立たないと思われているSさんのぽんぽんと肩を叩く励ましが、Iさんに素晴らしい文章を書かせたのです。

業務計画説明会の日、全職員がその冒頭の文章の朗読に涙し、今年度一年の新たな出発を決意したのです。

Sさんは、私たちに教えます。「何もできなくたって、励ますことはできる」と。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

私たちは、毎日毎日、いくつもの支援上の困難に出会います。喋ることができない知的障害の方々の本当の気持ちをわかっていくのですから、それは当たり前です。難しいに決まっています。さらに本当の気持ちがわかったとしても、実現できそうもない、ちょっとやそつではお手伝いできそうもない気持ちに出会ってしまうことも度々です。

「お父さんやお母さんと一緒に暮らしたいなあ」「もっと何回も帰省したいなあ」「私の暴れる行動、早く治らないかなあ」「もう一回歩けるようにならないかなあ」「居なくなったお母さん、捜してくれないかなあ」…、挙げていけば切りがありません。

極めつけは、「私の障害は治りますか?」「私は生まれてきて良かったですか?」「私は迷惑な存在ではないですか?」こんな本当の気持ちを知ってしまった時に、私たちのできることは本当に限られています。

そこで、Sさんの教えてくれた言葉が、ここで生きてきます。

「何もできなくたって、励ますことはできる」

何もできないのは、なにも最重度知的障害と呼ばれる方々だけの話ではないのです。私たち定型発達と呼ばれる人たちだって、先ほどのような気持ちに出会った時には、何もできないのです。本当に困っている人に出会った時、それは友達であっても、親であっても、子どもであっても手伝えることは限られています。

例えば、友達が、自殺したいと言っているその時、自分たちには何ができるでしょうか?癌を宣告され、余命いくばくもないという人に、自分たちは何ができるでしょうか?二年前の3・11の時には、多くの津波の犠牲者を前に、また、メルトダウンした原子力発電所の放射能の前に、何も役に立たない、何もできない自分たちを突き付けられました。

Sさんは、言います。「何もできなくたって、励ますことはできる」と。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

あるメンバーさん、Aさんにこんな話をしたことがあります。十年ほど前の話でしょうか。

その方は、実家が遠く離れ、思うような帰省ができません。実家が大好きなのに、その方のお父さんやお母さんは、いつまでも「うちの子は、学園のことが大好きで…」とおっしゃっていて、ちっとも親子の心の溝が埋められません。思春期は、度重なる大暴れ、少しずつ少しずつ穏やかな生活を手に入れつつあるというものの、さすがに自分たちの支援力が彼女にある一定の幸福をもたらすところまで届きません。

そんなとき、「何もできなくてごめんね」と彼女に謝ったのです。すると彼女、筆談でこう答えてくれました。「あやまらなくてもいいよ、だっていつもはげましてくれている」と。筆談でのやりとりですから、本当にそんなことを、しゃべることができない重度の知的障害の方が思っているの?と感ずる方もいるのではと思いますが、私にとって、この瞬間は、今でもかけがえのない真実として、心の中で生き生きと生き続けています。ここで十年以上の月日を経て、Sさんの励ましと、Aさんの励ましが私の中でぴったりとつながりました。

落ち込んだ時、挫けそうになった時、自分が何もできないと思った時、自分が何も役に立っていないと思うとき、Sさんの言葉、Aさんの言葉が私の心の中でよみがえります。そして、そんなことに励まされている自分に気がつくのです。励ましているのは私ではなく、励まされているのが私なのだ…。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>